《修士論文要旨》

平安時代の作り物語における天皇について

松村　孟*

平安時代の物語文学で日本の政治の公的頂点である天皇という存在がどのように表現されていたのかを調査する。

天皇について書かれた論文は存在するがそれらの多くは人物論や実在の天皇との比較がされたものであり、物語上で天皇がどのような存在であるとされているかを調査した論文は見られない。そこで天皇という存在がどのように表現されているのかを調査し、物語の制作時期によって天皇の立場がどのように変化したのか「竹取物語」「宇津保物語」「落窪物語」「源氏物語」「狭衣物語」「夜の寝覚め」を用いて調査する。

1章で「公」の立場としての天皇について調査する。

初めに、基本的に天皇という存在がどのようなものであるかということを登場人物から見た天皇でなく、ただ天皇というものがどのように表現されているか調査する。このことについて改めて物語上で書くというとはほとんど無く一例として宇津保物語のように天皇の命令に従わない等の普通ではないことが起こった為に改めて述べられるという例がある。

すべての物語を通して天皇という存在は、公的権力の頂点におり変化していないということができる。

次に、物語の中では政治について書かれる事はほぼ無いが、司召しについては物語でも書かれる。そこで、司召しを中心に天皇と政治のかかわりを調査することにする。そしてその当時の政治体制を考察する。すると物語の政策時期によって司召しを行う経過の部分については物語の制作時期によって変化する。

例えば、宇津保物語では、天皇が司召しを定めるが、夜の寝覚めでは主人公である右大臣が司召しにて出世させる人物を定めその決定は院ですら反対できなくなっている。

ただし最終決定権はあくまで天皇自身が握っており夜の寝覚めでも天皇の信任の下で行われている。もし天皇の信任無く天皇の持つ権力を犯したならば、国が乱れることが源氏物語から考えられる。

平成23年度　*文学研究科国文学専攻

司召しによる官位の決定は天皇の持つ権力である。しかし、実権を握っている人物は物語の制作時代によって変化しているということが述べることができる。そして、その立場が物語制作時期とともに変化している。

2章では「私」の立場としての調査を恋争いからしている。

宇津保物語ではあて宮の恋争い自体は長く続くが、求婚者達の和歌が書かれる順番や返歌がされた割合によって勝利者は読者にはあらかじめ暗示されている。

しかし、源氏物語や狭衣物語を見ると、同じ恋争いでも勝利者は主人公である光源氏であり狭衣になっている。ただしこの二つも勝利者が主人公であるだけで内容が異なっている。

源氏物語では光源氏自身で争ったわけではなく親である桐壺帝と左大臣が決めたことによる消極的勝利である。このことによって光源氏のほうが東宮よりもすばらしい人物であるということを示している。ただし恨みを買ってこのことが原因で後の不遇につながる。

狭衣物語ではこれに対してもともと和歌のやり取り等を行っている中に割り込んでいって積極的勝利を行っている。この後の事も源氏物語と異なり狭衣側に不利益なことは起こっていない。このことから、完全に相手の精神的上位に立っているといえる

3章では1・2章で調査してきたことをまとめ、物語の中で天皇の立場がどのように変化したのか最終的な考察をする。そしてこれからの研究方法の新しいスタイルを述べる。

※　文中に「物語」とだけあるときは、竹取物語・宇津保物語・落窪物語・源氏物語・狭衣物語・夜の寝覚めを表す